



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	E. J. Simmons (Ed.), <i>Continuity and Change in Russian and Soviet Thought</i> , Cambridge, Massachusetts, 1955
Author(s)	鳥山, 成人; Toriyama, Shigeto
Citation	スラヴ研究, 2, 135-142
Issue Date	1958
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/4935">https://hdl.handle.net/2115/4935</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113002.pdf



E. J. SIMMONS (Ed.) *Continuity and Change in  
Russian and Soviet Thought*

Cambridge, Massachusetts, 1955

鳥 山 成 人

Preface によれば、本書は The American Council of Learned Societies と The Social Science Research Council の The Joint Committee on Slavic Studies の主催で 1954 年 3 月 26-28 日に開かれた会議の報告をまとめたものである。この会議はロシア研究の指導的学者十人からなる委員会によって準備され、六つの基本テーマ(部門)の設定と各テーマごとの四つ乃至五つの報告及び報告担当者は一年前に決定されていた。報告担当者の報告原稿は会議前かなり早目に会議参加予定者に配布され、各部門の議長予定者はこれをもとにして綜括報告の原稿を用意した。会議では報告の後で討論が行われ、この討論の記録を参照して各報告者は原稿に加筆し、これを会議全体の議長でもあった Simmons が編集したものが本書である。

本書はこのように米国のロシア研究者多数を動員し、周到な準備と手続きを経て出版されたものであり、しかも表題(共通テーマ)が表題であるだけに、われわれ外国のロシア研究者の注意をも十分に惹き得るものである。しかし具体的にどのような問題観からこのような共通テーマでシンポジウムが企てられるに至ったのかは、委員会がこの共通テーマについて六つの部門を設けた理由と共に、Preface でも、又 Simmons の手になる Introduction (pp. 3-7) でも明かにはされていない。Introduction で Simmons は共通テーマの意味する所について一応の説明を試みているが、これは特に取上げるほどの内容のものではない。又個々の報告についてみても、報告者の側にこの共通テーマへのアプローチの意図がはっきり認められるものは少ない。報告者達は「連続と変化の問題を伝

染病のように避けた。」と第二部の総括報告で M. Fainsod はなげいているが、事実第二部に限らず報告者の多くは、共通テーマに拘束されることなく、時には恐らくこれを意識することすらなく、与えられた問題を自分の関心を中心に処理している。そして主にこのため、各部門の議長(総括報告者)は担当部門の諸報告を共通テーマの線に沿って総括するのにかなり苦勞しており、時にはこのための努力を放棄さえしている。共通テーマの線に沿った総括は、第五部門の議長としての Simmons のものを除くと、ほとんど成功しておらず、しかもこの Simmons のものにすら、後述するように大きな問題がある。この辺の事情は、わが国でも痛感されている人文・社会科学部門における総合研究の困難が、この分野での先駆者たる米国学界にもあることを示すものとして興味深い。それはとにかく、本書はこうした意味で、表題にかかげている問題の解明には、直接にはあまり寄与していない。

しかし今かりに本書を——表題とは一応かわりなしに——19-20 世紀のロシア(及びソヴェト)思想に関する論文集として受けとるならば、そこにはロシア研究者の関心をそそる論文が少なからず収載されており、しかもその中にはわが国では材料の不足から本格的な研究の困難なものも少なくないので、本書はわれわれにとっても貴重なロシア研究書ということになる。そこで以下このような観点から個々の論文(報告)を取上げることにするが、論文の数が多いことと紹介者自身の専門と関心に制約されて、紹介が不十分なものになるであろうことを予めおことわりしておく。

## I. Realism and Utopia in Russian Economic Thought

### A. Gerschenkorn, *The Problem of Economic Development in Russian Intellectual History of the Nineteenth Century* (pp. 11-39)

後進国の工業化問題一般に対する関心から、筆者はロシアについて、国の経済的繁栄を第一に考えて農収制の問題をもこれに従属させた Pososhkov に対して、人民の福祉を最高の目的として工業化への関心を欠いていた Radishchev が 19 世紀のインテリゲンツィアの経済観の先達であったとし、以下デカブリストからナロードニキの理論家に至る代表的インテリゲンツィアの経済観を検討している。晩年の Belinskii と Pisarev を例外として、他の思想家は、ニュアンスの差はあれいづれもロシアの工業化に否定的乃至は懐疑的であって、ロシア経済の現状認識と発展の見透しにおいて誤っていたが、これは彼等の考え方が究極において農民の価値体系と国の後進性に規定されていたためであると筆者は考えている。

### S.M. Schwarz, *Populism and Early Russian Marxism on Ways of Economic Development of Russia (The 1880's and 1890's)* (pp. 40-62)

ナロードニキが Chernyshevskii を精神的指導者と仰ぎながら、理論的には Herzen の後継者であったとの説（この場合前者のミール観の独自性、経済における技術・生産の重視が指摘されている）が注目される。ミールの評価・ロシア経済の見透しにおいて Marx と Engels が違っていたとの主張は思いつき以上のものではない。Vorontsov, Daniel'son のロシアにおける資本主義発達不可能論乃至無用論とこれに対するマルクス主義者 (Plekhanov, Struve, Lenin, Tugan-Baranovskii) の批判の内容の説明は、簡単ではあるが要を得ている。Herzen の思想における自由主義の側面の強調（これは第三部の Malia と第六部の Berlin の論文でも力説されている）には Berdiaev の Herzen

観の影響が考えられるように思われる。

### O.H. Radkey, *Chernov and Agrarian Socialism before 1918* (pp. 63-80)

19 世紀のナロードニキの農業社会主義が Chernov などによって理論的に修正・補強されて再建された事情、SR が農業生産の社会化を二次的な問題として土地の社会化（これは土地国有化と区別されて地方分権につらなる）を当面の目標としたこと、この社会化は勤労農民への平等な土地用益権附与のための主張であったこと、しかし土地社会化の具体策は欠けていて、もしこれが実行に移されたら、多くの困難に直面したであろうことなどが述べられている。SR における農民への献身と社会主義への献身の二元性とその矛盾という理解の仕方は平板にすぎないように思われる<sup>1)</sup>。

### A. Erlich, *Stalin's View on Soviet Economic Development* (pp. 81-99)

ソヴェト経済の発展は当面市場関係の利用によって可能であるとする Bukharin と「本源的な社会主義蓄積」によるべしとする左派との論争 (1924-27) において、Stalin は前者を支持し、初めは急激な工業化と集団化を考えていなかったこと、1828-29 年の穀物危機の原因が「商品（工業製品）飢饉」と「重税」にあったことは Stalin 自身認めており、集団化の当面の目的も農産物集荷の強化にあったと思われること、右翼反対派の主張した農民への譲歩は政治的危機を招くと考えながらも、Stalin は集団化を工業化と平行せずにこれに続くものと考えていたが、工業化と集団化の関連から集団化が急がれるようになったこと、などが論文の要旨である。大すじは M. Dobb などが既に述べているところであるが、これが Stalin の発言の政治性を顧慮しつつ、資料的に裏づけられている。

### A. Gerschenkorn, *Part I Review* (pp. 100-109)

90 年代のロシアでマルクス主義経済理論が

1) Radkey は近く *The Agrarian Foes of Bolshevism* (Promise and Default of the Russian Socialist Revolutionaries, March to October 1917) を出版の予定である。

勝利を得た理由は、後進国の工業化の問題と関連させることによって理解され、従って第一革命後には工業化の成功と共にブルジョア・イデオロギー確立の基礎が置かれたとの主張が注目される。

## II. Authoritarianism and Democracy

R.F. Byrnes, *Pobednostsev on the Instruments of Russian Government* (pp. 113-28)

人間の生得的な悪と不平等、国民的信仰による国の性格の決定、歴史的伝統による各国の政治形態の必然的相違、有能で責任感ある行政官の必要などの Pobednostsev の政治哲学の概観に続いて、ロシアの統治手段として彼が特に重視したのは法律と裁判制度、検閲と宣伝、教会と家庭であったとし、これらについてやや具体的に述べている。地主貴族とロシア・メシアニズムに対する彼の無関心と民間の汎スラヴ主義運動に対する彼の危惧についての指摘が注意をひく。

M. Karpovich, *Two Types of Russian Liberalism: Maklakov and Miliukov* (pp. 129-143)

ロシアの政治生活において自由主義の果たした役割を低くみる通説に批判的な筆者が、ロシア自由主義の二つの型を代表すると考える Kadets の二指導者 Maklakov, V. A. と Miliukov の対立を第一革命期を中心にあとづけたもの。前者はゼムストヴォ活動家の伝統に立って、革命を排し、右翼及び政府側の識者とも協力して改革を徐々に実現せんとし、後者は、人民主権の条件は熟しているとして、完全な制憲議会の即時開催を要求し、左翼よりは右翼を危険視した、とされる。重要な関係資料たる Miliukov の「回想記」(1955)の出版前に書かれているが、今日でも筆者の考えの大すじは変わっていないものと推測される。

T.T. Hammond, *Leninist Authoritarianism before the Revolution* (pp. 144-156)

レーニン主義にはプロレタリアートに対する

信頼と不信が混在しており、労働組合に対する態度にこれが最もよく現れているとの観点に立って、Lenin の労働組合理論と政策をあとづけ、Lenin は常に党による組合の指導を主張していたとして、これを、党組織論・大衆団体に対する態度一般と関連させ、又「経済主義者」、Plekhanov、「解党派」、Struve, Chernov などの対立を通じて明かにしようとしたもの。Lenin の思想の革命性を非民主性と等置する理解の仕方が特徴的である。<sup>1)</sup>

### A. Ulam, *Stalin and the Theory of Totalitarianism* (pp. 157-171)

Stalin の権力獲得の過程(反対派との闘い)とその後の独裁の実体を考察したもので、その際、全体主義に不可欠のイデオロギーの役割という観点と、Stalin による巧みな social and psychological engineering という観点が特に前面におし出されている。新な中間層(官僚と技術者)の成立と共に、党の指導とイデオロギーの役割は後退し、Stalin の死亡前には、ソ同盟は純粋に官僚的な独裁国家になりつつあったと筆者はみている。

### M. Fainsod, *Part II Review* (pp. 172-79)

帝制政府の頑迷が温和な自由主義者をも革命主義者にしたという指摘や Stalin によるシンボル操作の矛盾面を研究する必要があるとの主張と共に、全体主義の基礎は Lenin によって早くに置かれており、従って彼を民主主義者とする伝説は誤っているということの力説が特に目につく。

## III. Collectivism and Individualism

N. V. Riasanovsky, *Khomiakov on Sobornost'* (pp. 183-196)

すべての信者の愛における自由にして真実なる唯一の統一といった Khomiakov の Sobor-

1) Hammond は最近 *Lenin on Trade Unions and Revolution, 1893-1917* (1957) を著した。

nost' 観念を中心に、彼の教会観と Shism に対する評価、Iranianism と Kushitism の二元論を特色とする彼の世界史観との中でスラヴ、特にロシア人の道徳性と社会制度=ミールに与えられている高い地位を概観したもの。So-bornost' 観念の系譜と共に、彼における宗教と民族性の等置の矛盾がローマン主義の影響から説明されている点が、筆者の著書 *Russia and West in the Teaching of the Slavophiles. A Study of Romantic Ideology* (1952) の問題観とも共通するものとして、注目される。

M.E. Malia, *Herzen and the Peasant Commune* (pp. 197-217)

Herzen の共同体論の内容と特色を論じたものであるが、論文全体を貫いているのは、彼が徹底した自由と人権の擁護者であったという観点で、彼にとっては共同体の本質も土地共有という制度面よりも、ロシア農民の権力に対する反撥とすぐれた自治能力を証明している点にあったとされており、他方彼は、共同体が個性の発達に対して有する阻止的な面を顧慮しつつ、社会主義の実現のために共同体原理と西欧個人主義の総合を考えており、彼の西欧社会批判とロシア共同体理想化も、革命への寄与におけるロシアと西欧の同権の主張であって、その限りで彼の patriotism が認められる、とされている。ソヴェト学界での Herzen 評価との観点の相違がかなりはっきりしているだけに興味深く、本書中最も読みごたえのある論文である。

J. D. Bargamini, *Stalin and the Collective Farm* (pp. 218-36)

集団農場に関する Stalin の思想をほぼ時代を追って概観したものであるが、叙述の中心はいわゆる集団化の時期におかれている。Stalin が集団化政策の見取図を最初からもっていたと考えることも、逆に Stalin が集団化を突如強行したと考えることも誤りである——後者の場合は、マルクス主義的な理論的根拠や先行した準備が無視される——との筆者の結論は第一部

の A. Erlich の論文の主張とも通ずるものがあるが、実証と叙述の面ではこれに劣り、平板で説得力が弱い。

J. Towster, *Vyshinsky's Concept of Collectivity* (pp. 237-54)

論文の主要部分をなす Vyshinsky の全体性概念の要約では、「革命的合法性」に関する部分が興味を惹く。結論的には、Vyshinsky の全体性概念は「regime の諸制度を維持し、現状を正当化し、党指導部が根本的と考える諸価値と信念を伝統化する努力」であり、この概念の形成には「全体性のロシア的伝統」とヘーゲル法哲学の影響が認められる、とされている。このような筆者の観点は、最近のソヴェト法学界の Vyshinsky 批判とは、いうまでもなく立場を異にしている。

R.W. Mathewson (Jr.), *The Hero and Society: The Literary Definitions* (1855-1865, 1934-1936) (pp. 255-76)

農奴解放期の革命的民主主義者の評論・作品にそれまでの「余計者」に代るものとして現れた行動的な「新人」のタイプ(典型的には、「何をなすべきか」のバフメトフ)と、30年代のソヴェト文学に描かれている社会主義建設の英雄(典型的には、「拓かれた処女地」のダヴィドフと「鋼鉄は如何に鍛えられたか」のゴルチャギン)を分析して両者の類似を結論したもの。本書の共通テーマに最も忠実な論文であるが、二つの英雄のタイプの具体的な継承関係にはふれておらず、<sup>1)</sup> 又両者の類似点として否定的側面(粗野・冷酷・党派的判断・大衆からの孤立など)を強調しているのが特徴的である。

M. Karpovidh, *Part III Review* (pp. 277-80)

思想の連続や変化にはその条件となった環境・状況に注意すべきこと、個々の思想のロシ

1) 来春(1958)に出版を予定されている筆者の著書 *The Positive Hero in Russian Literature* では、これが取扱われることが期待される。

ア的独自性の判断には慎重たるべきことを暗示的に述べている点が重要である。

#### IV. Rationality and Nonrationality

##### G. Florovsky, *Reason and Faith in the Philosophy of Solov'ev* (pp. 283-97)

Solov'ev の哲学における「信仰」と「理性」のそれぞれの役割と両者の究極的一致という思想を説明したもの。この思想は Solov'ev において一つの歴史哲学として展開され、彼のアプローチは 90 年代初めの思想的「危機」の後も本質的には変らななかったが、晩年におけるその変化によって「信仰」と「理性」の問題も全く新たな内容をもつに至った、とされている。Comte を含むフランスのユートピア社会主義の Solov'ev に対する影響とその内的必然性の指摘は興味深い。

##### W. Gurian, *Partiinost' and Knowledge* (pp. 298-306)

マルクス主義における科学的真理の階級性の思想を継承し、Lenin などによってこれをプロレタリア的真理の党派性=客観性の主張に発展させたポリシェヴィキが、革命後社会の全存在の決定者として、科学・文化面においても唯一の指導者となり、従ってマルクス主義の解釈・具体的適用の可否も党によって決定され、その強調面も党の政策全体との関連で変わって来ている、というのが論文の趣旨であるが、この問題についての筆者の理解は概して表面的で、現象面だけを追っている感をまぬがれず、又 30 年代初めまでの党の文化政策が党派性の主張と実践の面でそれ以後のものとは違う点が看過されている。

##### G.L. Kline, *Darwinism and the Russian Orthodox Church* (pp. 307-28)

ダーヴィニズムとロシア正教会の関係の歴史を予備段階 (1859-84)、「俗人」段階 (1885-92)、「教会」段階 (1893-1917) に分けて考察したものの、N. Ia. Danilevskii のダーヴィニズム批判 (1885) に対する論評やこれをめぐると、

S. S. Glagol'ev (モスクワ神学アカデミア教授) のダーヴィニズム批判、特にメンデリズム紹介 (1913) 論文におけるその説明が叙述の中心をなしている。結論として筆者は、ロシア教会のダーヴィニズム批判は西欧キリスト教会のそれに比して相対的には冷静・合理的・学問的であったとし、その原因についても一、二の推測を述べているが、この非戦闘的性格ということは、更に深く追求するならば、ロシア教会の性格一般を明かにする上にも役立つものと思われる。

##### T. Dobzhansky, *The Crisis of Soviet Biology* (329-46)

Lysenko 学説の勝利の過程とこの学説の内容を批判的な立場から概観し、19 世紀以来のロシア (及びソヴェト) 生物学の発達史の歴史を辿って Lysenko の勝利を以てソヴェト生物学の解体と断定し、又この勝利は、生物学とも農業とも関係のない、党のイニシアティブによるソヴェト科学への民族主義の侵入の結果であるとしている。この問題に関する発言の多くがそうであるように、筆者の議論も多分に政治的なものを感じさせ、これがかえって論文の説得力を弱くしている。

##### H. Marcuse, *Dialectic and Logic since the War* (pp. 347-58)

第二次大戦後のソヴェト哲学の新たな動向を示すものとして、敵対的矛盾と非敵対的矛盾の区別、下部構造と上部構造の関係についての新解釈、形式論理学の復権の三つあげて、これらが社会主義から共産主義への移行と国際関係の安定という現段階の政治目的に対応したものであることを説明するのが論文の主な狙いであるが、この点についての論証は成功しているとはいえない。しかし、ソヴェト哲学は一般に、自然弁証法の優位、歴史・主体・自由の意義・役割の低下、弁証法的過程の決定論的・機械論的過程への変形など、弁証法を硬直せしめて、ヘーゲル哲学及び古典マルクス主義から逸脱した、との筆者の説は検討に値するものと考えられる。

G.T. Robinson, *Part IV Review* (pp. 359-77)

1. 論理的思考は革命前のロシア思想では未成熟であり、2. 革命後の共産党の思想も論理性の水準は低く、3. 後者の原因の一部は前者に求められる、というのが筆者の命題で、このうち第一の命題は、ロシアの専制が理論を欠いていたこと、ロシア教会の理論に対する関心の低さと有力な宗教的思想家達に共通の知性に対する不信、ナロードニキ思想における論理性の弱さなどの指摘によって一応証明されているが、第二・第三の命題の証明は論旨不明確である。しかし文中にみられる Kline, Florovsky, Marcuse の説の補足・修正乃至批判には傾聴すべき点もある。

## V. Literature, State, and Society

R. Wellek, *Social and Aesthetic Values in Russian Nineteenth-Century Literary Criticism* (Belinskii, Chernyshevskii, Dobroliubov, Pisarev) (pp. 381-97)

Belinskii を取扱った論文の前半では、彼の文芸批評の立場の推移がローマン主義の影響下に育った当時のドイツ批評界におけるそれと並行関係にあること、1843 年以後特に最後の二年間に彼の立場がかなり変わったこと、この変化にもかかわらず彼が最後まで美学的批評の立場を守ったこと、彼以後の急進思想家やソヴェト文芸批評の Belinskii 評価は一方的であることなどが主張されている。残り 3 人——このうち Pisarev を他の二人と峻別することに筆者は反対している——の文芸批評については、筆者の評価は概して低いが、社会的文学研究理論への彼等、特に Dobroliubov の寄与は高く評価されている。

V. Erlich, *Social and Aesthetic Criteria in Soviet Russian Criticism* (pp. 398-416)

革命後文学研究及び文芸批評の有力な一つの流れとなった Formalism の内容と、これに對

して 20 年代中葉マルクス主義の側から加えられた様々な批判、この批判活動を一契機として起ったマルクス主義陣営内での右派と左派の対立を略述した前半の部分は、筆者の著書 *Russian Formalism, History-Doctrine* の関係部分の要約とすることができる。主として社会主義リアリズムの問題を取扱った後半では、プロレタリア作家協会の解散とソヴェト作家同盟の結成を文芸に対する党の指導権強化策とみる点、社会主義リアリズムについて「社会主義」と「リアリズム」の矛盾を指摘し、これを架橋すべく「典型」の概念が持出されたとする点などに筆者の立場がうかがわれる。

L. Stilman, *Freedom and Repression in Prerevolutionary Russian Literature* (pp. 417-32)

Nicholas 1 世と Alexander 2 世の改革時代が論文の中心をなしている。筆者は、Nicholas の目的が政府支持のものも含めて一切の世論を沈黙せしめることにあり、この政策がかえって文学や文芸批評の反響を大きなものにしたのに対して、改革時代には政府は政府機関誌の発行などによる積極的な世論の指導を企てたが、これも失敗したとし、又すぐれた文学者達が政府の指導と同様、急進的批評家の側からの働きかけをも拒否して、文学の自主性を堅持したこと、19 世紀後半言論の自由が実質的に著しく進展したことを力説している。

R.M. Hankin, *Main Premises of the Communist Party in the Theory of Soviet Literary Controls* (pp. 433-50)

筆者が Stalin 時代の共産党の文芸指導理論の二大構成要素と考える 1932 年までの党の経験とレーニンの文学理論とを考察したもの。前者は V. Erlich の論文とほぼ同趣旨のもので、第一次五カ年計画期の文芸政策転換の意味についても、Erlich 同様 E.J. Brown, *The Proletarian Episode in Russian Literature, 1928-32* (1953) に従っている。1925 年の文芸政策に関する党の決議の妥協的性格を当時の読者層の

量・質と党内の対立から説明している点は興味深い。後者では、1931年以後 Plekhanov に代って Lenin がソヴェト文芸理論・政策の典拠となり、narodnost' と partiinost' 特に後者が強調されるようになったことなどが述べられている。

E. J. Simmons, *Part V Review* (pp. 451-69)

continuity and change という観点をはっきり表面におし出した総括報告で、この部門の諸報告の整理・補足もこの線に沿って行われている。即ち、20年代のソヴェト文学の三つの大きな傾向として文学におけるプロレタリア運動の流れ、同伴作家・批評家の流れ、マルクス主義的文芸批評の立場があげられて夫々について連続と変化が考えられているのを始め、文学統制の理論と政策については連続より変化が、19世紀唯物論者=批評家や古典作家の再評価には「計画された連続」が、大衆の文学的嗜好には連続が考えられている。などである。しかしこういう形で現象面を追ってばらばらに連続と変化を決定して行くことの意味はどこにあるのか、紹介者には甚だ疑問である。

## VI. Russia and the Community of Nations—Messianic Views and Theory of Action

I. Berlin, *Herzen and Bakunin on Individual Liberty* (473-99)

本書の諸論文のうち恐らく最も情熱をこめて書かれているもの。この情熱は、Herzen の徹底した個人主義に深く感銘した筆者がヨーロッパ思想界における彼の思想の独自性を強く主張しようとする志向から生れている。Herzen は歴史的必然・進歩・人民の福祉・平等などの抽象的理念のために人間を犠牲にしたり、現在を未来のための・個人を全体のための捨石にしたりすることに徹底的に反対し、普遍的道德律を否定して個性の尊厳・意志の自由を擁護したとされている。しかしこの個人主義と彼の社会主義との関連は明かされておらず、又彼の個人主

義の説明そのものも十分整理されたものとはいえない。筆者が Herzen との間に架橋し難き深淵を見ている Bakunin の自由概念の分析の方が、批判的な立場から書かれているだけに、簡単ながより明快である。

H. Kohn, *Dostoyevsky and Danilevsky: Nationalist Messianism* (pp. 500-15)

19世紀ロシアの民族主義的メシアニズムを代表する Danilevsky と Dostoyevsky の思想を、前者の「ロシアとヨーロッパ」と後者の「作家の日記」を中心に概観したもの。前者では民族主義、後者ではメシアニズムに重点があったとされている。同様のテーマについて筆者がこれまでに書いているものに比べて、Danilevsky, Dostoyevsky の議論と Stalin のそれとの類似に文中各所で言及されているのが目につき、これは勿論共通テーマを意識してのことであろうが、現象面における類似の指摘にとどまっている。

K. E. Mckenzie, *The Messianic Concept in the Third International, 1935-1939* (pp. 516-30)

第七回大会におけるコミンテルンの新政策採用によって共産主義のメシアニズムに生じた変化を明かにするのが論文の目的で、このため筆者は、新政策採用当時のコミンテルンの世界情勢分析と新政策採用の理由づけにふれた後、「統一戦線」、「人民戦線」、「人民戦線政府」、「新たな型の民主主義(新民主主義)」といった言葉の内容を、Dimitrov などのコミンテルン指導者の発言を素材に分析している。しかし叙述は必ずしもメシアニズムの問題に焦点があっておらず、又、大戦後の「人民民主主義」の起りを30年代末の「新民主主義」にみている以外、筆者の説明には特に注目すべきものはない。

F.C. Barghoorn, *Great Russian Messianism in Postwar Soviet Ideology* (pp. 531-49)

大戦後のソヴェト・イデオロギーの中で大ロ

シア・メシアニズムが果している役割を近代政治学の立場から、社会心理学的方法や新聞・雑誌の論文内容の検討によって明かにしようとしたもの。分析はかなりすどく、多くの示唆に富んでいる。大ロシア・メシアニズムが上からのシンボルにとどまらず、独立の存在たるの側面をも有していることの指摘の如きがそれで、このメシアニズムの表現として具体例をあげて説明されている「人類に対するロシアの軍事的奉仕」、ロシア民族の“internal mission”, ロシア文化の「世界的意義」についても、筆者はこ

れらがソヴェト民衆あるいは知識層の心理の中にある程度の根拠をもっていることの指摘を忘れていない。しかし筆者の考察は概して静態的で、時に動態的ではあっても歴史的とはいい難く、ここに筆者のアプローチそのものの問題がある。<sup>1)</sup>

P. E. Mosely, *Part VI Review* (pp. 550-4)

短文で内容にも特に注目すべきものはない。

---

1) Barghoorn はこの後 1956 年に *Soviet Russian Nationalism* を著している。